
孤独を大声で叫んではならない

ツングー正法

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独を大声で叫んではならない

【Zコード】

Z9510Y

【作者名】

ツングー正法

【あらすじ】

私は孤独だった。あまりに孤独だった。

もう、自ら命を絶つほか、この状況から逃げ出す手を知らなかつた。しかし、そう決心した私の心の叫びは、様々なものを私の下へ呼び込み始める。

想像だにしていなかつた状況下、私は孤独の再認識を開始した。

私は孤独だった

陽が沈んだ。

私の部屋が闇に包まれてからしばらく経つが、灯りをつける気にもならない。

ソファの上、窓の向こうを力なく眺める他、何ら生産的な活動をする気にはならなかつた。

言葉に表すことが出来ないほど、巨大な孤独が私を押しつぶそうとしている。

あまりに孤独だつた。

私の名前は、町マチ小枝コヅエ。

この状況から逃れるには、死ぬしかないのではないか。そう思い始めたところだ。

カーテンも閉めていない窓の向こうから、外の光が部屋へとさしこんでくる。人工の光だ。

この安アパートは道路一本挟んで繁華街に面しているため、環境は劣悪だつた。行き交う車は途絶えず、流れるポップは騒がしいし、売り子が怒鳴る声が部屋にまで入つてくる。ネオンサインのけばけばしい光は、あまりに低俗で、満天の夜空を満たす星明かりと勘違いができるほどのものでもない。

そして、星は街の夜空から永遠に除かれて、戻つてくることはない。

大好きだつたプラネタリウムも景気悪化に伴い、とうに閉鎖してしまつた。数々の願い事を受け入れ、自分を抱擁してくれた星空は、もはやない。

同時にかつちゃんと手を取り、無邪気に実現不可能な願いを唱えていた初心な自分も死んだのだ。ここに残るのは涙であり、濁り、抜け殻でしかない。

かつちゃん……客観的に言えば元カレだが、主観的に言わせても
らえば、大罪人に他ならない。

私の心を土足で踏みつけ、一方でこちらからどんなに語りかけて
も、それとわかる反応がなかつた。彼の心の水面は、あまりにねつ
とりしてて波紋がたたない作りなのだ。まるで、洞穴に向かつて
叫んでいるようなものだつた。

付き合えど付き合えど、関係は進展せず、時間ばかり減つて、歯
痒さばかりが増えるばかりだつた。

孤独感を紛らわせるためでなければ、どうしてあんな男が自分の
精神の一部を占めるなんて事態を許しただろ？

そう、全ての元凶は孤独なのだ。

でも、もうプラネタリウムは潰れたことだし、プラネタリウムで
かつちゃんと交えた囁きを思い出すのは苦痛でしかなかつた。あん
な男、膾にまみれて変死すればいい。

かくいう私も、これを機会に、死んでしまうべきだろ？
どんな方法が一便手つ取り早いのか。ネット上で、親切な人が説
明をしてくれるかもしれない。ネット上にはあととあらゆる親切な
人がいるのだ。

ぶーん、と音がして私の携帯『デカヅエ』が緑色に点滅した。

また脣メールが携帯の受信箱に積もつていく。親から、兄から、
その脳なしの嫁から、バイト先から、大学から、そして顔を思い浮
かべたくもないかつちゃんから。

あのくそ忌々しい男は、恥知らずにもメールなど送つてくるのだ。
直接、私と対面するのが、それほど怖いのだろうか。

熱い怒りが私に力を与え、携帯へ手を伸ばすことが出来た。

「かつちゃんのバカ……人でなし……無神経……ハイパー無神経……

…

私はぶつぶつ言いながら、携帯の中に積もつたメールを一件一件、
丁寧に消去していく。

大昔、携帯を買ってもらつたばかりの頃は、スパムのメールを捨てるだけで身を切るような痛みを感じたものだ。だが、もう全てに慣れてしまった。精神は痛みになれ、摩耗され、そして原型を失つていく。

どのメールでも、誰も彼もが口先だけで綺麗なことを並べて、私の気を惹こうとしている。ときめいたり、わくわくするような種などなかつた。それに気付くのになぜこんなにも時間がかかったのか、自分でも理解不能だ。

嘘に飾られた文書で田を汚すことなんてない。私はメールを残らず消去した。携帯をがらんつ、とテーブルに放る。

世の中、全てのものの表面が嘘で塗りたくられている。

うーん、とまたデカヅエがバイブする。

「……っさいわね

ぶーん。

「もう我慢ならないわ

私は低く唸ると、携帯をひつつかんだ。広くもない部屋を一步で横切り、窓を全開にする。

腰をひねり、前腕と二の腕の角度を九十度に保ちつつ振りかぶる。左足をひねつてトルクを与え、それからベランダの床を踏み抜くほどに叩きつけ、思い切り携帯を投擲した。

「デカヅエは闇の中を一直線に飛んでいき、瞬時に見えなくなつた。

「さらばデカヅエ。よき星にて生まれ変わらるのだ」

私は呟いて、携帯の消えた空をしばらく眺めていた。

地上がこれほど無駄に明るくなれば、おおいぬ座シリウスの脇に、等級4ぐらいの新惑星デカヅエが見えたことだろう。

ストレス源の携帯が消えたことで、わずかながらすつきりした気分になり、踵を返した。

部屋に戻つて、電気をつけなければならない。暗闇で生活していると、異常に化粧が濃くなつてよろしくないのだ。

それなのに、足が進まない。私は訳もなく部屋に入れずにいた。

前面に暗黒の自室、背中に外の猥雑な空気を感じたまま動けなくなつた。田の前の自室という暗い小空間に戻れない。戻つて、胸を締め付けられる気持ちを味わいたくない。不条理なことに、暗い部屋で、音を立てる携帯もなく、ますます味気がなくて、耐えがたく思えた。

ベランダの柵を背中に感じている。これを越えて、不愉快なもの全ての終止符を打つのがどうして難しいだろうか。

私の部屋は、このアパートの三階にある。飛び降りて死ぬのには十分な高さだろう。

私は夜風を受けながら、その行動力が自分の中で成熟するまで、じつとしていた。

やがて、機は熟したと思えてくる。

やるか。柵を乗り越え、わずかな自由落下でことは解決する。あまりに単純だった。

心を決めたその時、すぐ横で何かが動く気配を感じた。

暗がりの中で金色の瞳がきらりと光る。私はすんでの所で悲鳴を殺した。

「猫……ちゃん？」

エアコンの室外機の上、闇を切り取つて、ふわふわの毛皮でくるんだような感じの生き物がいた。

真っ黒だった。完全に闇に溶け込んでいて、瞳は宙に浮いているようにしか見えない。私がおそるおそる伸ばした手を、拒むでもなく撫でさせてくれた。

首輪をつけていないにもかかわらず、毛並みは綺麗だし、そしてその金色の瞳。驚くほど静かに、取り乱す私を映している。私は一発で魅了された。

両手を広げると、猫は自分から私の胸に飛び込んできた。私は夢中で猫ちゃんを撫でながら、部屋へと戻る。

「猫大好き……！」

頬が緩むのを抑えられない。

「猫ももちろん、私のこと大好きよね」

猫を抱くのは生まれて初めてだが、予想していたよりも柔らかくて、温かかった。

なぜこの子達と、私はもつと早く出会わなかつたのだろう。人間と違つて、彼らにはうんざりする類いの裏表というものが存在しない。完全無欠の友となり得るとすれば、動物たちだろう。

もちろん、ペットショップを覗いてみたことがないわけではない。だが、契約で友を得ようという行為は浅ましく、一欠片の正当性もないように思つた。国民の大半が銀行を教会と認識するほど、経済活動重視の病んだ世の中だ。金が全てだと思った瞬間、人間はおしまいだといつのに。

そう、こういう巡り会いこそ、私が待っていたものだつた。

出会つてほんの一分で、私は癒やされ、人間を相手にしたときは、ついた感じたことがないほどリラックスしていた。

そんな状況で、私は気がついたらかつちゃんの悪口を猫にぶちまけていた。

「あの男、無神経なよ。とーにかく無神経なよ。全体的に神経数が欠如してるんだわ。昔の私は青かつたとはいえ、長々と付き合つて……信じられないわ。あんな奴、ただでさえ少ない神経が、びまん性に突発的な壞死をおこして死んでしまえばいいのよ」

得たばかりの友に、下衆の愚痴を流し込むなんて、なんとも罪深い。でも、私は自分の中に溜まつた負の感情に窒息しかけている。どうにかしてそれを解き放たなければ、私は朽ち果てる寸前だつた。

そして、猫ちゃんは全てを受け入れてくれた。

「かつちゃんなんて忘れようと、いろんな人に近づいてみたけど、やっぱダメなの。どいつもこいつも、自分のことばかり。もう耐えきれないのよ」

ふと気になる。この猫……人語を理解したりするのだろうか。ばかばかしい。私は頭を振つた。

しかし、実際、猫ちゃんは私を見つめて微動だにしない。私の価値のない言葉を全て聴いてくれている。

猫が私の会つた中で、最高の聞き上手だなんて、おかしなものだ。でも、不満なんてない。あるはずない。猫ちゃんのおかげで、乾ききつて、ひび割れた私の心に、なにかが沁みてきて、本来あるべき形へ治してくれる気がする。

泣きそりになつて、思わず、猫ちゃんをぎゅっと抱きしめた。

そうだ。

こういつときのために、ちゃんと贈り物はストックしてある」とを思い出した。この素晴らしい友をもてなさなければならない。私は台所へ駆けていつて、戸棚を開いた。

「猫ちゃん、じつちおいでいいものあげる」

かつおぶしの塊を揺らして、猫ちゃんを誘惑する。

猫ちゃんは飛びついてくるものと予想したが、首を傾げてソファの上から動かない。

「……かつおぶしは古典的過ぎた？」

とはいって、私はポップ・カルチャーを全否定しているので、今日の猫が何を好むのか、全く知らないのだ。

猫は困ったように首をひねりながら、かつおぶしを受け取ると、舐めたり嗅いだりしていた。そして、おずおずと私の足下へ返却してきた。

「なによ！ 私の贈り物が受け取れないって言つたのー？」

私は猫をにらみつけた。猫は肩でもすくめるように、ビデオを揺らした。

贈り物を受け取ることを強要しようとしている時点で、すでに贈り物の精神から外れている気がしないでもないが、でもせっかく用意したのだ。無下にされたら悔しくないわけがない。

角を立てないためにも、妥協して受け取つて笑顔を作るのが筋ではないか。猫といえども。

「はあ……」

溜息が出る。溜息をつくと幸せが逃げると誰かが言つていた。でも、些細なことに幸せを見つけることが出来るほど私は子供じやない。幸せの絶対量が初めからゼロに近いのだ。

怒りを持続する氣にもならなかつた。

「いいわよ……自分で食べるから」

かつおぶしをがりがり囁りながらも、猫ちゃんに見つめられると、また愚にも付かない言葉が口を突いて出てくる。

「結局、私は世界の眞の姿を突き止めてしまつたのね。世界は嘘だらけ。将来死ぬ肉の塊に、せつせと嘘の情報を詰めて彷徨うもの、それが人間よ。こんな連中の群れに混じつて、単色の人生をただすごすなんて耐えられる？ しかも、放つといても、人間は百年生き

ちやう時代よ、

メトロホームのように猫のしつぽがゆづくりと波打つのを見ながら、私は言った。

「悪いものが入ってきて、墜ちて行く前に、自分で自分を始末しようと思うの。あなたに最後に話せて嬉しいわ。だから、お願ひ、全てを聞いて記憶してちょうだい」

猫は前触れもなく立ち上がると、とととと窓ガラスの隙間から抜け出でていった。

「猫ちゃん？ どこ行くのよ……」

私は狼狽して急いで追いかける。だが、すでにベランダに猫の影はなかつた。

汚れた室外機や、雑多なゴミが散らばるだけだ。

「ちょっと……ここまで聞いておいて、私を見捨てる気！？」

口からかつおぶしが転げ落ちる。私はそれにも気づかず、呆然と虚空を見つめていた。

やがて部屋に戻ると、糸が切れたようにソファの上に崩れた。

耐えろ、ゾゾ。泣くほどのこともない。野良猫が部屋を横切つただけの話だ。こみ上げてくるものを抑えよつと、手のひらをまぶたに押し当て、歯を食いしばつた。

適当な動物に期待をして、心の一部を止めさせよつとした報いだ。深く考えず、相手も選ばず、何をやつているのだか。

その時、ベランダで「そ」音がした。見ると、黒い毛の塊が動いていた。

「猫ちゃん！」

猫はベランダから、なにかを部屋に引っ張り上げようとしている。外で何を拾つてきたのだろうか。

そういえば、猫はどこかに新たな居を構える際に、その主に土産物を持って行く、と聞いたことがあつた。世間の猫好きが流布した噂とばかり思つていたが、現実にここまで猫が律儀な動物だつたは、予想外だ。

獲りたてのネズミや「キブリ」だつたら堪らない。が、見たところ
猫ちゃんはなにか瓶のようなものを転がしてくる。
猫は床の上にしゃがんだ私の足下でそれを止めた。

「くれるの？ わあ……」

胸が一杯になる。

かつおぶしはお気に召してくれなかつたよつだが、お返しのため
にも、私は猫を喜ばすためにあらゆる手をつくさないといけない。

私は瓶を拾つて、記された表示に目をやつた。

「なになに、『M A O 阻害薬^{モノアミンオキシダーゼ}』処方せん医薬品……抗うつ薬……
あなたの気分を明るくして、物事をポジティブに考えることが出来
るようになるお薬です……他のお薬と併用することで予期せぬ副作
用……ご不明な点は薬局まで……』なによこれ」
私はじろりと目を動かして、猫を見下ろした。

「こんなものを一体どこから……いや、そんなことよりも……私の
苦しみは薬なんかでこまかせるものだと言いたいの！？」

私の怒鳴り声に、猫は身をすくませる。

「若い人間の自殺が増えてるのも知つてるけど、薬でどうとかしよ
うという根性からして気にくわないわ！ 根本的に考えてみてよ。
悪いものを一時的に抑えておこうという、その考え方からして問題
よ。子供の夏休みの宿題じゃないあるまいし。お国の政治から個人
の価値観まで、いろいろ狂つてる世の中をどうにかするのが先でし
よ！ それを今の若者がだから自殺が多いとか、勝手すぎるの
よ！」

私は一息にまくし立てて、大きく息を吸つた。

「死のうとしているのは解決策であつて、逃避ではないのよ！ 見
くびらないで」

親しき間柄でも、礼儀は重要だと思つてゐる。現代に生きる私た
ちは得てして忘れてしまいかちだが、他者への敬意は大切だ。
こんな侮辱は見過^ごせない。

「なめた真似すると、肉を三味線、皮を鍋にするわよ

私は猫に顔を近づけ、針を刺す。

猫は目をまん丸にして、固まっていた。

「はあ……所詮は動物よ。大脳辺縁系使って、本能に従つてる奴らよ。畜生」ときに私の苦悩を理解してもらおうといつのが無理なよ……神経数が足りないんだわ」

私は呟く。これは事実であるはずなので、侮辱にはあたらないと私は判断した。

猫というのは、特に孤独っぽい生き物に感じる。孤独に苦しむなんてこともなさそうだ。

私は空しく笑った。私は一体、この子に何を期待しているんだか。自分の笑顔は泣き顔に近いんじゃないんだろうか、なんて自分でも悲劇的な気分になつてくる。

「分かってるわよ……私の苦悩を押しつけようとするのも勝手よね。癒やして欲しいのは私だもの。許してちょうだい」

そう言ってから、何もかもが嫌になつた。

何が悲しくて、こんな世の中で這い回つていなければいけないのだ。どうして私が周りに合わないことを苦しむ必要があるのだろう。

「あーあ、もう死んじゃおうかな……」

猫はぶんぶん首を振ると、薬の瓶に片脚を載せてみやーみやー鳴いてくる。

「黙らうしゃい！」

私は一喝して黙らせた。

「死よりもシな選択肢があれば、それを喜んで選んでるわよ。安易に死ぬことが、生命への冒涜を表しかねないことも理解しているわ。でも、これは考え方抜いた結果なのよ。止めよつとするのなら、ちやんと責任を負つてちようだい」

私は猫に告げた。

だいたい、この現代社会であらゆるしがらみから逃れて心安らかになれる場所なんて、どこにあるというのだ。まず、文明世界の都心部は論外だ。

辺境の世界で心清らかな人々と、暖かみある交流をして過ごすといふのは確かに魅力にあふれる。契約、義務、訴訟、債務、そういうものが追つてこないユートピア。

だが、現実には問題が山積みなのだ。

チベットのような場所へ移るにしても、出国や移住、あらゆるお役所手続きや障害が立ちふさがる。もつと近場の高野山なんて遙かに面倒そうだ。女人が入ることすらできないのではないか。

「人間を超越した存在にでもなることが出来ればいいのに。もうつまらないモラルとかコードなんてない、ものすごく自由な存在……。人の目も、法の目も気にしない、言うなれば絶対悪……」

私は遠い目をして呟く。

「……でも、そんなのないわよね」

猫がその言葉に機敏に反応して、ヒゲを立たせた。窓の外へ出て行く。

また去つて行く氣かと思つたら、猫はベランダに止まり、妙な動作を始めた。

「……何する氣？」

トイレでも探しているのかと思つたけど、明らかに動作がおかしい。

前脚でベランダの床に何かを描いている。何か、パターンを持つた模様だ。繰り返し繰り返し、一心不乱に描いているのだ。

古来、黒猫は不吉な運気をまとい、魔性の者に通じると言われてきた。

無知な昔の人間の迷信と断言するのはたやすい。だが、考えてみれば、火のないところに煙が立つはずがないのだ。

猫の前脚の軌跡が紅く光を放つ。不吉な印象を与える、紋章のようなものだった。

さらに猫がそれをなぞり続ける内に、紋章が脈打つように明滅した。鉄の匂いのする空気が渦を巻いている。

生まれて初めて見る超常現象に、私は息を呑んだ。猫は何かを召

喚しているのだ。

音もなく周囲の闇が凝縮を始める。

それが紋章の上で一点にまとまり、そして翼をもつ生き物に変化した。

カラス……？

いや、羽ばたくスピードが極端に速いし、翼の形も特徴的だ。

コウモリに違いない。

それはむくむくと背を伸ばし、人の形をとつた。

漆黒の衣に包まれた、長身。長髪の下、白い顔が浮かび上がる。品が良さそうで、そしてまつたく生命つ氣を感じさせない男の顔。「くくく……闇を求める貴様の声に応じて、我輩はここに現れた」黒いマントをまとう男は、唇をつり上げて笑つた。かすかに犬歯がきらめいた。それは牙のように長くて鋭く、そして血にまみれるのに慣れきつた冷酷な色をしていた。

「我輩は吸血鬼だ」

「吸血……鬼」

闇の怪物。

人間の血を吸い、数々の闇の眷属を操る、恐ろしく強力な化け物。その人類の宿敵とでも言つべき、吸血鬼が私のベランダに立つている。実在したのだ。

まあ、これほど小説から映画、ありとあらゆるメディアに登場しているのだ。実在していない方がおかしい。私は痺れた頭で考えた。「招かれなければ、貴様が家に入ることが出来ぬ。さあ、我輩を招くがよい。狭すぎる人間の殻を捨て、闇を満喫する、誇り高き種へと昇華するのだ」

吸血鬼は、にたりと笑つて言つた。私は命じられるまでもなく窓を全開にする。

そして、次の瞬間には吸血鬼の腕の中にいた。吸血鬼の牙が、ぬつとその姿を露わにし、冷たい吐息が私の頸に掛かった。

私はうつとりと、その闇の気配を味わう。

「そんなに気軽に、私を同類にしてくれていいの？」

「我輩は貴様の強き孤独の念に惹かれるのだ。我々は闇の中に住まう。そこには、偽りの影を生む光など、初めからない。我々はあるがままに生き、望むがままを為すのだ」

「いいわね……最高よ、そういうの」

金色の瞳のみが見守る薄闇の中で、私は体温のない逞しい体に回した腕の力を強める。

「貴様には覚悟がある。ヨーデラキュリーナになるだらう」

「じゃ、私を吸血鬼にしてちょうだいな」

「くく……よからう」

冷たい牙が私の頸に触れた。さよなら、私の周りのつまらない日常。陶然とした意識の中、私は思った。

でも、どうも、こうやって話がどんどん拍子に進むと、私は逆に用心深くなってしまう性質なのだ。私は念のため、ちょっと相手を確かめてみるとする。

私は吸血鬼の耳に囁きかけた。

「ところで私、AIDSなのよ」

吸血鬼は身を離した。

「我輩、突然急ぎの用事を思い出した。わいばである」「ちょっと待つた！」

歩み去ろうとする吸血鬼のマントを思いつきり引っ張った。マントに首を絞められた吸血鬼が、ぐへっとしみき声を上げる。

「嘘よ。……なにその変わり身の早さ」

「ええい、離さぬか！ 貴様はAIDSで……あの忌むべき病で我が種族がどれほど死に絶えたのか知らぬのか……」

「知らないわよ！ そんなのあんた達が、のべつ幕なく人の血を吸つたからでしょ！」

吸血鬼はマントを振りほどこうともがくが、私はがっちらりと握つて離さない。

「で、なに？ 病気が感染するのが怖いから、私を吸血鬼にするのはなし？」

私の問いに、吸血鬼は少し考え、

「同族にしてやることはかまわん。……が、その前にHIVと肝炎ウイルスの検査を受けてもらおう。いや、それでも心配だ。他の病も検査せよ。梅毒、結核、淋病、日本脳炎、塹壕熱」

吸血鬼が既知の感染症、全てを列挙しようとするのを、私は不機嫌な呻きで遮つた。

「さあ、我輩とともに夜間病院へ行こうぞ」

「もういいわよ…」

私は叫んだ。

「幻滅だわ。吸血鬼ってすごいモンスターだと思つてたのに。病気に怯えてなにが不死人よ、闇の怪物よ、夜の王よ」

「我々はすごいモンスターである！ 我らは犬に、コウモリに、霧に、自在に姿を変え、夜の世界を支配」

「変身が何よ。人間だつて、酔えばトラになるし、他にも負け犬になり、鳥目になり、兎唇になるわ」

「吸血鬼は人間をぼろ雑巾のよつに引き裂く怪力を持つておるのだ！」

「私だつてぼろ雑巾ぐらゐ裂けるわよ。全然たいしたことないじゃない！」

「ぬうう、素直に感心して、畏怖する場面だといふのに、この小娘は…！」

吸血鬼がわめく。彼の爪がにゅつと伸びて、髪が逆立つ。そして、体毛が濃くなり、目が真つ赤に染まつた。

闇の怪物がいきり立つてゐるのだ。身長すら伸びて、その頭は天井をこすらんばかりだ。邪悪な気迫が脈打ち、私を打ち据えた。

あいにく、ちつとも怖くない。ちつこい犬が、強がつて吠えていふようなものだ。もうこいつの底にある弱々しい部分を垣間見てしまつた以上、恐怖の感じようがなかつた。

「あら、どうするの？ 私の血を吸う度胸もないんでしょ？ 暴力でもふるう？」

私は挑発的に言つてみた。

吸血鬼は口をかつと開き、目から炎を吹いていたが、やがて、私の見ている前でしおしおと小さくなつていぐ。元の大きさに戻つてしまわがれた声を発した。

「いや、それは出来ぬ。人間相手に問題を起しすと、聖別された刃物を持つて、ラテン語を口ずさむ陰気なお兄さん方に我輩は追いかけ回されるのだ。我輩、戦いは苦手でだな」

「はあ……」

溜息がでた。

「見下げ果てるわ。ブラム・ストーカーが嘆くわよ」

「誰なのだ、それは？」

「出行つて！」

私は全開になつている恋を指して、吸血鬼を睨み付ける。彼はあたふたし始めた。

「いや、そんな殺生な。貴様の望みに応じてはるばる来てやつたのに、帰れなどとは……！ せめてトマトジュースの一杯ぐらいは出てもおかしくあるまいか？」

「うちにはかつおぶししか常備してないのよ」

私は猫を抱き上げて撫でながら言い放つた。

「その猫だつて、我輩の眷属なのだ！ だから我輩にももつと敬意と恐怖を」

「あら、上の無能を下が補うスタイルね。猫ちゃんの方が百倍、好感触てるわ」

「そんな……」

闇の怪物はがつくりとうなだれ、力なくベランダへ出て行つた。その姿は日光に曝された後のように弱々しかつた。

誰にも注目されず

猫をテーブルの上に下ろし、私は力なくソファに崩れ落ちた。とんでも見かけ倒しもあつたものだ。

結局、嘘のかたまり。かの吸血鬼の伝説だつて他のみんなと同じ。偽りの言葉ばかり集めて、それを信じるバカをバカにするだけ。血を求めて甘い声をかけてくるなんて、低脳のポン引きと同じレベルじゃないか。

本当に私のことを考えているはずもなかつた。そんな高尚な精神の下地はないだろう。暗くてしめつた培地には、ひねくれたものしか生えないので。

まったく、嫌になる。

「私はそろそろ死ぬべきね

私は言つた。

「早まつてはならぬ！ 貴様はよい吸血鬼になれる。だから、我輩と病院で血液検査

「シャラップ！」

私は一喝して黙らせた。

まだいやがる。しつこいようなら、バチカンやヴァンパイア・ハンターを呼んで、駆除してもらわないといけないといけないのかもしれない。だが、今はそんな気力もなかつた。

私は理解した。吸血鬼になつたところで、何の解決にもならないのだ。

死ぬ運命だらうと、不死だらうと、なにも変わらない。私が逃れたがつてはいるものから逃れることも出来ず、得るものはあまりに少ない。惨めなだけの不死人になるなんて問題外だ。

ポイントは、私が何か、ではなく他者との接点の不完全さなのだ。七十億も人間がいる中で、何で誰とも本当の意味で理解し合えないものかしら。誰も、他人の感情を理解できないのよ。理解してい

るよつに振る舞うことしか出来ないの」

猫相手に、私は言った。

あまりに人間は不完全な生物だと言つしかない。そして役にも立たない知性ばかりが膨らんで、アンバランスなのだ。誰もが自分を中心と考え、他者のことを考慮することもない。他者を注目することすらない。

「分かる? だあれも、私を注目なんかしてくれないのよ」

私は嘆いた。

猫のヒゲがぴくっと震えた。立ち上ると、部屋の隅へと走つていぐ。

「どこ行くの?」

猫は壁の一点を見つめて、微動だにしない。

安アパートの壁は汚い。長年にわたる雨漏りや、タバコの煙の結果、シミだらけだ。でも、なにか猫の気を引くような、面白いものが貼つてあるわけでもなかつた。

もしかして、あれだらうか……。猫は、靈とか見えないものを見ることが出来るといつ噂。私の部屋には何か地縛霊とか憑いているのだろうか。

次の瞬間、猫は後脚立ちになると、勢いよく部屋の壁で爪を研ぎ始めた。壁紙が千切りになり、木くずが飛び散る。

おとなしい猫ちゃんが、このような暴挙に出ることを予想していなかつた私は、一瞬対応が遅れた。

「ああもう……壁で爪研ぎとか、ねえし!」

私は猫のしつぽを握ると、頭上でぶんぶん猫を振り回した。悲鳴が上がるが、構わず百回振り回した。

しつけは大切だ。ゆとりが大切なって言う人間がいるため社会がおかしくなっている。やっぱり、鉄の規律に鍛えられてこそ、人間も動物もしゃきっとする。私はそう考えていた。

よれよれになつた猫の顔をのぞき込み、

「今度やつたら、あんたの頭をジャック・ハンマー代わりに使って、

リフォームするからね。分かつた？」

猫を床に放り捨てた。

壁の被害を確かめた。薄い壁はずたぼろで、部屋の貧相さをさら

に強調している。無視できるダメージではなかつた。

薄い壁は、猫が三秒爪を研いだら壊滅したのだ。いくら安アパートとはいえ、脆すぎる。信じられない。もはや建築詐欺のレベルだ。果たして、ホームセンターへ行つて、自力で直せるレベルなのだろうか。

ふと、違和感を感じた。だまし絵を見ている気分になつた。なん

だろう、二次元が三次元へと化けていくような感覚だ。

私は目をしばたたき、壁を注視した。猫が破いた壁紙の向こうに、何かがあつた。

長年、壁のシミだと思つっていた黒い点が、壁の向こうで正体を表

している。

ぞつとした。

カメラだつた。

私はどうにか驚きを飲み込んで、目をそらした。

監視されている！？ 私は極めて注目されていた。

一体、誰によつて？ 親だろうか？ 娘が問題なく一人暮らしをやつしているか見るために？ いや、私の親だ。それはない。

すると、他人なのだ。誰か知らない人間が、この部屋にカメラを仕掛けたのだ。

一体何のためだろう。想像もつかない。

足下がぐるぐる回る中、どうにかソファへと戻つて座る。

ソファに座つていれば、カメラのある壁に背を向ける格好になるとはいへ、今現在も一拳一頭足が見られていると考えて間違いないだろう。

それとも、カメラは複数仕掛けられているのだろうか？ 部屋は暗いが、赤外線カメラかもしれない。あるいは、盗聴器まで？

猛烈な吐き気を感じた。肌を虫が這つているような感触が消えない。

「……胸が悪いわ」

耐えきれずに、呟いた。

「大丈夫か？ 吐くか？」

ベルンダの暗がりから、吸血鬼が心配の声をかけてくる。

まだいやがるのか、と私は彼を睨み付けた。あんなの相手にしている場合じゃない。カメラの方が遙かに深刻な問題だ。

手近な武器

ふと、大学で流れていた噂が意識に上る。盗撮魔の噂。

この一帯に住む若い女を狙つたもので、その手筋は巧妙。油断しているとカメラを仕込まれて、私生活の全てを覗かれてしまう。逃げ足も速く、カメラに気づいたとしても、その時にはカメラと盗撮魔を繋ぐケーブルは断たれてしまつて、足取りはつかめない。警察もお手上げ、との噂だった。

くだらない都市伝説だと聞き流していたが、自身が被害者になってしまった以上、他人事ではない。

噂を信じるなら、盗撮魔は足取りを掴まれにくいやうに、安物のありふれたビデオ・カメラ一台のみを使つそうだ。すると、ソファに座つて背を向けていれば、表情を読まれることはないわけだけだ。それでも、常に見られているという事実を認識してしまつた。背中に他人の視線を絶え間なく受けている。不快なくすぐつたさがつきまとい、無視することが出来ない。

どうにか対処しなければならない。

カメラを発見した素振りを見せなかつたのは、我ながら見事だつた。ひとりポーカーで鍛えた私の鉄面皮は伊達じやない。

なんとか盗撮魔を出し抜いて、償いをさせる。それも生まれてきたことを後悔させてやるほど。そうでもしないと、気が済まない。コヅエの必殺の逆襲だ。全身の皮を剥いで、棒に縛り付けて蟻塚に放置、という拷問がある。敵はそれを受けるに値する。

今年の夏はクソ暑かつたため、人に見られてはならない姿で、人に知られてはならないことばかりやつていたのだ。許すことは出来ない。

嫌悪感は、私の内側で炎へと姿を変えていた。かつちゃん相手に感じていた燃えるような炎ではない、復讐を意図した、氷のように冷たい炎が燃えていた。

人間は、本当に怒つたとき、逆に冷たくなるのだ。私は冷え切つた頭で、復讐のプランを練る。

ふと、計画に予測できない因子が含まれていることに気づいた。窓の外からこっちを見ている吸血鬼だ。イレギュラーと呼ぶほかない存在。

ついさつき、カメラの真ん前であれと抱き合つたりしたものだが、果たして吸血鬼の存在が公になつて大丈夫なのだろうか？

「ねえ、吸血鬼」

「なんだ？」

吸血鬼が嬉しそうに部屋に入ってきた。

「この部屋、ずっとカメラで撮影されてたんだけど、あんた平気なの？」一応、吸血鬼は秘密の存在で、世間の表舞台には立てない、とか設定あるんでしょう？」

「くくく……はつはつは！」

吸血鬼は身をのけぞらせて大笑した。

「無知な娘よ！ 我々偉大な闇の種族が鏡に写らないことも知らんのか！」

「鏡じゃなくてカメラよ、ぼけなす」

カメラを背にしながら、吸血鬼の襟首を掴んで怖い声を出す。途端に吸血鬼はびくびくしだした。

「ほ、ほら、鏡に写らないことは、我輩の体は可視光線を歪める能力を持つているようだ」

「ああ、それでカメラのような光学機器にも映らないというの。意味をなすわね」

私は半眼の顔でうなづく。

そして、私はおもむろに吸血鬼の手首を握った。

「おお、娘よ。ようやく我輩の闇の口づけを受ける気になつたか。よし、病院へ行つて検査を」

吸血鬼が何か勘違いして言つていたが、私は構わず彼を投げた。

横隔膜を落として丹田に力を込めるとき、左足をすり足で進めながら、

手首を押さえている腕を床に向けてたたきつける。

いわゆる、肘当て呼吸投げだ。

護身術として一時期習っていた合気道の出番だった。

「ちょ……うわっ！」

私の仕手は大した腕ではないが、吸血鬼は素人そのものだ。容易にバランスを崩して、床の上を転げた。

私は瞬時に腕を解いて、吸血鬼の尻を思い切り蹴飛ばした。

狙い通りだつた。吸血鬼の体は体勢を崩したまま直進して、壁のカメラの隠してあつた部位に激突した。部屋が大きく揺れる。

吸血鬼の頭は、完全に壁にめり込んでしまつた。カメラは大破したことだろう。私はガツツポーズを決めた。

合氣道のすごいところは、怪力だつたり大柄だつたりする敵に女の腕で太刀打ちできることだ。力学や、敵の反射を利用しているためだとか。

吸血鬼相手の最高の体術と認めざるを得ない。

吸血鬼を壁から引き抜く。カメラのレンズは粉碎され、火花を散らしていた。上出来だ。

吸血鬼はカメラに映らない。盗撮魔が見ていたとしても、突然カメラが壊れたことに腰を抜かしていることだろう。

一方の吸血鬼の方は目を回している。私は嘆かわしげに首を振つた。

「力は強いのかもしれないけど、こうやってどつかれることに耐性ないのね」

恵まれた環境にいながら、それを生かそとしない奴に、私は虫酸がはしる。

「もう、帰りなさいな。ベラ・ルゴーシが見たら梅やむわよ」

「だ……誰でふかほれ……？」

「失せろ！」

私は発作的に吸血鬼の頭をカメラに叩きつけ、双方にとどめを刺

した。

人事不省に陥つた吸血鬼のマントを引っ張つて、ベランダに引きずり出す。都合のいいことに、この安アパートのゴミ集積所は私のベランダのほんの十メートル下にある。ダストシートがこちらに口を開けていた。それに吸血鬼を投げ入れるのに、なんの造作もなかつた。

「灰は灰へ。ゴミはゴミ箱へ。ハイメン」

私は言い残して、部屋に戻つた。

「はあ……」

なんだかくたびれる。がっくりと身を折り、額に手を当てた。
事態は好転しない。他人に見てもらつといつても、私の尊厳を踏みにじる形での盗撮など、許容できるはずがない。

孤独感と、言葉に出来ない絶望感は強まるばかりだ。不必要に傷口をつついて悪化をせるようなもので、物事が悪い方向へとしか進もうとしない。もう嫌になる。流砂の中でもがいてる方がまだ有意義だらう。

猫が足下にやってきて、気遣わしげに鳴いた。

それを抱き上げ、猫ちゃんの額に唇を押しつけた。

「心配してくれるの？ 優しいのね」

私は囁いた。こいつら無償の愛の提示ほど嬉しいものはない。
でも、なんだらう。妙な寒気というか、変な感触がさつきから徐々に強まっているのを感じている。

私の調子は悪かった。あまりに強い孤独が、私の体をむしばんでいる。

それにしても、氣分が悪い。全身に嫌な感触が走る。痛みとも寒氣とも違う……これは痒み？ もしや、食中毒だらうか。でも、別に最近拾い食いをしたわけでもないし、古い食材にチャレンジした記憶もない。

「私……どうしちゃつたんだらうっ？」

涙が止まらない。鼻水まで流れ出す。わらわくしゃみが十回ほど立て続けに出る。絶対におかしい。

なにか、途轍もない記憶の欠落がある気がしてならない。わかりきった答えがすぐそこにあるのに、出でこない感覚だ。私は戸惑いながらも、どうにか考えをまとめようとする。

猫ちゃんの顔を見つめた。金色の瞳が私を映している。

私は猫が大好きだ。その事実に誤りはない。

では、どうして猫が大好きなのに、今までこいつやって間近で触れ合ったことがなかったのだろう？

記憶の中で自分の泣き声や、親の厳しい声がこだました後、私の頭の回路が繋がった。

「あ……」

思い出した。

思い出してしまった。

「私、猫アレルギーだったわ」

私は言った。

腕の中で猫が固まる。

時間そのものが凍り付いたように、しばらくなにも動かなかつた。でも、すぐに腕の中で猫の心臓が激しく動き始めた。

私の惚れていた金色の瞳が、動搖して揺れ動く。そして、猫は叫んだ。

「思い出すの、遅つ！」

的確な突つ込みありがたい。だが、私たちの友情は終わりを告げていた。

私は窓を全開にすると、猫を思いつきり夜空に向けて投じた。

猫は、ぎにゃーっと悲鳴を引きずつて消えた。猫は高いところから落ちても平氣だし、もともと野良だ。遅しさにかけては、私などが及ぶものではない。元気にやつていけるだろう。

「さようなら。次に飼い主のところで、幸せになるのよ」

私は言った。

動物を飼っていると病院など、とにかくお金がかかって大変だと聞いていた。それに、お金をかける前にたぶんこっちがアレルギーで死ぬだろう。

避ける方法はなかつた。

悲しい。心で同調できると思つても、体の方がそれを許してくれ

ないなんて。

いや、それだけではないだろう。私は、自分がどれほど苦しかろうと、猫と一緒に過ごすことは選択できた。

だが、自分で気づいてしまっている。自分で利用するために、猫を呼んだという意識が消えてくれない。

盗撮魔に見られていることを無視できないのと同じく、私は過去の自分の考え方をぬぐつことが出来ない。

どさりとソファに身を投げた。

他人に慰めてもらおうとこう考えそのものが、私を裏切っているとこだわる。

どのみち、あらゆる動物はエサでも、異性でも争い合つようを作られている。猫ちゃんとのひとときなど、数少ない例外でしかない。種族的レベルで、絶対的に孤独。その事実に誤りなどないのだ。これから逃れる解決策は命を絶つことしかないようだ。

「ようやく死ねるのね」

私は言った。

ぱちっ、と壁からスパークが散つた。それへ皿をやる。その意味する結果をもう一度考える。

気がつけば、思い切り唇を噛んでいた。血の味が口の中に広がっている。私の顔は般若のそれへと化していく。

「死にきれんわあ！」

片付けなければならない仕事が残つている。

かつちゃんの件があつてから、永遠に純血の処女で生きようと決めていたのに、私は盗撮され、プライバシーは粉碎され、清めることができないほど穢された。これは血で清められなければならない。カメラを破壊したなんて生ぬるい。ぬるすぎる。盗撮魔にとつて、痛くもかゆくもないだろう。

償いが必要だ。盗撮魔は万死に値する。絶対に、生皮剥いで蟻塚だ。

復讐のチャンスはまだあるかもしれない。敵は私にカメラを発見されたかどうかは確証がないはずだ。カメラが単に技術的な問題で壊れたと考えたならば、敵は私の留守中に忍び込んで、カメラを交換して盗撮を続けることだろう。

私は盗撮魔にとつての獲物なのだ。そう簡単にあきらめるとは考えにくい。

吸血鬼というイレギュラーな存在を武器にカメラを破壊した私は、優位に立てるかもしない。

穴の開いた壁を探る。薄い壁を除けて、潰れたカメラを捨てる、奥から青いケーブルが出てきた。

「つかまえたわ」

敵の尻尾だ。すでに切れた尻尾なのがどうか、確かめてやる。私は自分のアイブックを持つてくると、このケーブルを接続した。すでに私は、便利なインターネット通話用のフリーソフトを所有している。私は歯を剥きながら、それをダブルクリックした。

『Kodueさん、こんにちは！ Skypeへようこそ！ どうへ通話しますか？』

「このケーブルの向こう側よ。繋いで。今すぐ」

『通話のためには相手先の番号もしくはアドレスが必要となります』

『そんなん知らないわよ！ 職業なら分かるわ……盗撮魔』

それを打ち込んで、エンターを押す。だが、記入必須部位の入力ができていないとの返答しか返つてこない。

私はアイブックに付いているウェブカメラを睨み付けて、

『ねえ、すでに通話したい相手とケーブルを繋いでいるのよ。前世紀の電話はもちろん、糸電話だってそのぐらい繋げて当然よ！ それを天下にその名を聞こえた、最先端ＩＴテクノロジーの寵児であるあなた達が通話を拒否するというの！？ 糸電話にも劣るということを、ここで証明したいわけ？ ジョブズがあの世で泣いてるわよ！』

『別にジョブズ氏とskypeは関係ありませんが』

「いいわ。私、残りの一生、糸電話で生きるから。糸電話でネット作つて、あんた達がいかに役に立たないか、死ぬまで言いふらしてやるから」

『「じゅぢゅじゅ」もプライドがあります。いいでしょう、そこ今まで言われたら繋がないわけにもいきません』

「一、と相手に「ホールしている音がたつ。

これからもskypeの「」顛廻を

「はいはい、」苦労様

ちゅうりいわ。

さあ、敵は電話に出るか。あるいは、すでにこの回線は破棄して、一度と私の手の届かないネットの深みに消えたか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510y/>

孤独を大声で叫んではならない

2011年12月5日22時47分発行